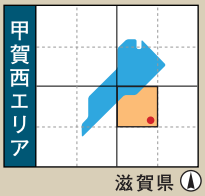
史跡
県指定

きゅうとうかいどうよこたのわたしあと
旧東海道横田渡跡

水口町泉　平成10年6月19日指定



徳川家康は、中央政権を強固にするための交通網の整備に務めました。江戸を起点とする五街道の中でも、特に重要視された東海道には東海道十三の渡しがあり、「横田の渡し」もそのうちの一つに数えられていました。現在では、そのおもかげを伝える巨大な常夜灯が残っています。

当時のできごと	
1634年	徳川家光上洛
1802年 1809年	十返舎一九が『東海道中膝栗毛』を著す
1833年	歌川広重が東海道五十三次（保永堂版）を描く

横田渡について

湖東地方から琵琶湖に流れ出る野洲川は、明治頃まで横田川と呼ばれて、水口町泉のあたりは川幅が狭くなっているため、古くより渡河の地点として利用されていました。江戸時代に東海道が整備された際には、軍事上の理由から通年の架橋は認められず、「東海道十三の渡し」の中でも難所の一つに数えられていました。『東海道宿村大概帳』によれば「川幅百六十九間（約308m）」だったそうです。

通行量が増えるのに伴い、寛永期（1789～1801）以降は、毎年10月から翌2月までの渇水期に、土橋が架けられるようになりました。土橋は長さ24間（約44m）、幅7間（約13m）あったと『東海道宿村大概帳』に記されています。

一方、渡船の料金は寛永13年（1801）に定められ、川会所や川高札が置かれました。金額はその当時で、水主2人乗で1人3文、水主3人乗で10文、水主4人乗で20文でした。

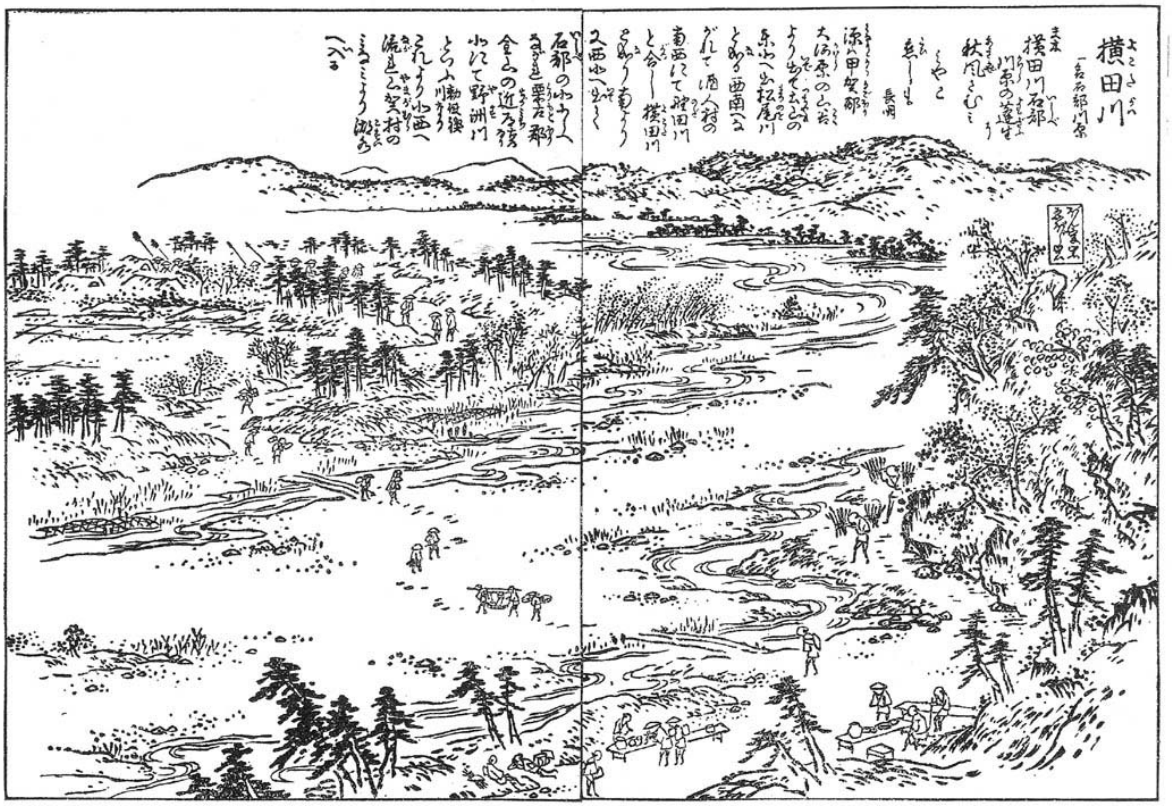
明治24年（1891）に川幅全てに板橋が架けられ、横田渡の歴史に幕を降ろしました。


横田渡常夜灯


講、寄進者などの名が見られます


明治時代の様子


（参考）史跡の対岸（甲西町）に残る安永8年（1779）の銘がある常夜燈



常夜灯が建立される前の横田渡の様子　（近江名所図絵より）

常夜灯

現在泉側に残存する常夜灯は、文政5年（1822）に目印の役割と安全加護を祈念し、水の神様である金比羅権現常夜灯として、建てられました。費用は東海道の宿々と、多くの旅人の寄付で賄われ、基壇の側面に彫られた寄進者と思われる人名は膨大な数に上ります。この常夜灯の高さは基壇の石垣の上から8mあり、東海道沿いの常夜灯の中でも類を見ない大きさでした。

明治29年（1896）9月の水害で1度倒壊しましたが、すぐに再建されました。



関連する文化財

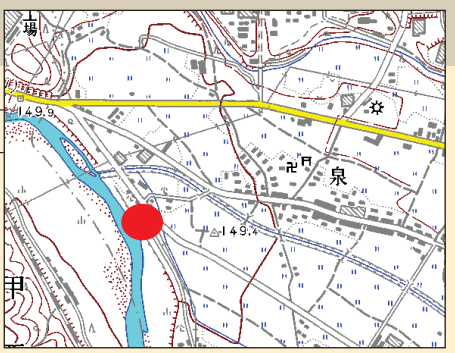
今宿一里塚（守山市）	学習シートNo.045
旧草津川（草津市）	典型的な天井川。江戸時代から既に著名であった
東海道大井川（静岡県）	旧東海道の要衝。軍事上の理由により橋が架けられなかった

もっと深く知りたい

水口町立歴史民俗資料館　☎0748-62-7141　甲賀郡水口町水口5638

草津宿街道交流館　☎077-567-0030　草津市草津3-10-4

旧東海道横田渡跡へのアクセス　JR草津線　三雲駅下車



【参考文献】〔図説近江の街道〕郷土出版社　〔中近世古道調査報告書（東海道）〕滋賀県教育委員会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月